

分科会22

スポーツを通してのリカバリー

鎗田英樹・勝嶋雅之（帝京平成大学）
大角浩平・松田氏・利根川幸子・下田氏、ほか（ひだクリニック）
河野菜穂子・坂下謙・桂井清太郎（team Laplace）
高橋健（柏メンタルクリニック）、橋本裕里（権利擁護あさひ）

本分科会では、当初の予想を上回る方々が参加され、演者の皆さんは緊張感もありましたが、大変盛況な中で発表を行うことができ、とても貴重な経験をすることができました。たくさんの方がお越し下さり、ありがとうございました。

前半は、日本における精神障害者スポーツの現状報告として、全国障害者スポーツ大会発足から遅れること7年、ようやく精神障害対象のバレーボールが正式種目化したことをきっかけに、リカバリーの一環としてのスポーツの可能性に着目した様々な取り組みについてのご説明をしました。その後、近年、全国的に広がりを見せているフットサルの現状報告として映像での試合風景の上映や、千葉県や他県におけるフットサル大会などの紹介、そして千葉県においては「第3の障害者スポーツ」として浸透拡大をはかっている障害者バスケットボールの大会などの活動報告がありました。

千葉県ではフットサルやバスケットボールの大会は以前は存在しませんでした。利用者さんはじめ、大会実施のニーズがみられたため、県内に有志を募って実行委員会を設けるなど準備活動をし、大会実施を実現しました。また、競技への関心や啓発を図るためにフットサルではジェフ千葉、バスケットボールでは千葉ジェッツの協力を仰ぎながら、プレー教室などの実施や本大会前にプレ大会を実施したことなども、これまでの活動ノウハウとして報告をしました。

競技性スポーツの中には、レクリエーション的なスポーツとは異なり、練習や試合ではよりシビアにフィジカル・メンタルの両面の葛藤や苦しさに直面し、自分や他者・社会や現実と向き合わざるを得ない状況や要素が多く含まれます。そのような中で、試合で勝ちたい、という強い希望や仲間との助け合いがエンパワーやつながりや絆を深めたり、自己効力感や自己評価を高めたりすることで、挑戦する勇気を持てたり、乗り越えたりというリカバリーにつながっている、と当事者さんもスタッフも一様に発言していたのが印象的でした。

後半はシンポジウム形式で、シンポジストの当事者さん、スタッフ入り混じって「スポーツ」への各自の思いや体験談、学びや気づきなどをそれぞれ話していただきました。マイクを使って人前で自分の話をする、というのは大変緊張するものですが、皆さんそれぞれ自分の言葉で胸の内を話してくださいました。そしてまた聴衆の分科会参加者の皆様は、うんうん、と優しく頷きながら聴いてくださる方が多かったため、温かな和やかな雰囲気の中かでシンポジウムを進めることができました。

それぞれのスポーツへの思いやスポーツを通じてのリカバリーを熱心にかつ堂々とお話しされる姿に、私たちも何だか「じーん」とさせていただいたり、今後の障害者スポーツの可能性を改めて強く感じることができたりした分科会でした。2013年の10月5日には第1回の精神障害者スポーツ国際シンポジウムが東京で開催されます。こちらも今後の動向が楽しみです。

《勝嶋雅之・鎗田英樹（帝京平成大学）》